続

尾州彫物師

瀬川治助 木彫の世界

はじめに

私が『尾州彫物師　瀬川治助　木彫の世界』を出版して十年余が過ぎ、印刷した五〇〇部は売切れ、再版は無いものと退職時に元本資料を廃棄してしまったので再版は不可能となっていた。

いっぱう出版直後に瀬川治助の銘のある確実な作品が見つかったものの、当時はもう見つかっても一、二点であろうとタカを括っていたのが見込み違いで、毎年一、三点ずつ新たな作品見出があり、十余年で四十点近くになってしまった。

先著で収録作品数は六〇余点であったので、筆者の見込み違いに忸怩たる思いがある。本来なら前著を併せ増補版とすべきであろうが、前著以後の分だけ追加版とするので、『続　尾州彫物師　瀬川治助　木彫の世界』としました。

基本的には追加ですが、資料関係は前著を踏襲し一括としたので、前著をお持ちで無い方も、この続編のみでも彫物師・瀬川治助の全体像を展望できるようにしました。

瀬川の作品が新たに見出されたのは、拙著が役立ったのか、各地から〝うちにもある〟との報で出かけ確認したものが多いのである。

さらに出版三年後に瀬川治助のご子孫が名乗り出られ、一部の系譜が判明したことも大きい。

今後もさらに瀬川家作品は見出されるであろうが、やはり時期というものがあるので、区切りとして出版をするので了とされたい。

明治前期の名古屋の各界有名人を記した『浪越有名三福対』は一枚ものの刷物で、その中に

美術彫刻師

桜ノ町　加藤長洲

末広町　瀬川重光

矢場三ノ切　小島人齋

と、彫刻三人衆ともいえる収録があり、瀬川重光は彫物師として著名であったことが知られる。なお後に瀬川重光は父重定と共に『名古屋市史　学芸編』（大正四年刊）にも収録されるほどであった。

しかしその後は近代建築の定理ともいうべき「無装飾の美」の影響を受けたのか、彫物師・瀬川治助や一門の活躍は聞かれず、まもなく人口に膾炙することはマレになり、先代からの数多の彫刻作品も忘れ去られた状態であった。

しかし今回、三代治助こと鍋三郎について確実な資料から初代・二代に劣らない作品を残していることが判明した。親鸞聖人七百五十回遠忌（平成廿三年）に併せて東本願寺大師堂の修復工事のおり、向拝を担当していたことが史料から明確となった。明治の再建時に京都組・北陸組・東海組の彫物師達に交じって手挟みを彫刻していたのである。

彫物師瀬川家三代がいかに東海地方を中心に活躍したか改めて見ていただければと思います。

平成廿三年冬

著者

正尊寺

・本堂・

▼「正尊寺」本堂全景

◀「正尊寺」本堂内殿

◀欄間彫刻「翡翠花」

▲右余間欄間 右 ―唐獅子牡丹―

▲右余間欄間 中 ―鷺蓮花―

▲右余間欄間 左 ―桐鳳凰―

◀内陣前欄間右 ―雲水龍―

◀内陣前欄間中 ―雲水龍―

▲内陣前欄間左 ―雲水龍―

▼欄間部分 ―雲水龍―

▲左余間欄間 右 ―松鷹―

▲左余間欄間 中 ―雲龍鶴―

▲左余間欄間 左 ―波亀―